

れども、そのできぬ者を誘引するには觀經と阿彌陀經との教が包容攝取の用をなす。これ又佛の大悲心の發露といふべきであらう。祖師の開顯せられた三經隱顯の釋義に信順して、些か自信の領解を述べた。諸賢の叱正を俟つ。

太子示現の文について

佐々木蓮磨

宗祖が叡山を出て六角堂に參籠し、后世を祈らせられたところ、九十五日の曉、聖德太子示現の文によつて吉水の法然上人の許に行かれたことは惠信尼文書によつて明らかにまつた。ところが、その文書に添えられていた筈の太子示現の文が紛失されているので、從來の學者は多く廟窟の偈を以てそれに當てていたのであるが、最近、宗祖自筆の夢記——行者宿報設女犯の四句の偈文が発見されたことによつて、それを太子示現の文に當てようとする新しい見方が生まれて來たのである。しかし、それは當を得たものでないと思う。何んとなれば行者宿報設女犯の四句偈は、宗教生活と性生活との調和を暗示し、宗教的に結婚を肯定する意味以外にない。ところが惠信尼文書によると、宗祖が六角堂に參籠された意圖は専ら「后世助かる道」「生死出づべき道」を明らかにする以外になかつたことは文面分明である。即ち人間の有限性に目醒めて専ら永遠の生命を願求されたものであつて、そこには性の悩みに關する言葉は全く出て居ない。若し惠信尼文書に對應するような示現の文を他の

聖教中から拾うならば、最須敬重繪詞(一)に「いかにしてか、このたびまめやかに生死をまぬがるる道を得んと思ひ給ひければ(中略)日本傳燈上宮王の濟度を仰いて(中略)六角堂へ百日の參籠をいたしたまひて、願くは有縁の要法を示し、眞の知識にあふことを得しめたまへと、丹誠を抽て祈り給ふに、九十九日に滿する夜の夢に、未代出離の要路念佛にはしかず。法然上人今苦海を渡す、彼の所に到つて要津を問ふべき由、慥かに示現あり。即ち感涙をのこい靈告に任せて吉水の禪室にのぞみ事の子細を啓し給ひければ、發心の強盛なることも有がたく、聖應の揭焉なることも他に異なりとて、聖道淨土難易の差別手を取てさづけ、安心起行肝要の奥旨舌を吐て述給けるに、日頃の蓄懷ここに満足し、今度の往生忽ちに決定しぬと悦たまふ。干し時建仁元年辛酉聖人二十九歳、聖道を捨て淨土に歸し、雜行を擱て念佛を専らにし給ける始なり」とある記録が最も眞實に近いものと思う。その理由としては、參籠のネライが「后世助かる道——生死出づべき道」である點、同く惠信尼文書と一致し、「日本傳燈上宮王の濟度を仰いて」とあることが太子の示現に對應するものであり、「聖道淨土難易の差別手を取てさづけ、安心起行肝要の奥旨舌を吐いて述給けるに、日頃の蓄懷ここに満足し、今度の往生忽ちに決定しぬと悦たまふ。干し時建仁元年辛酉聖人二十九歳、聖道を捨て淨土に歸し、雜行を擱て念佛を専らにし給ける始なり」の文は教行信證后序の「建仁元年辛酉捨雜行歸本願」の文、并に傳繪の「眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、教の理致をきわめて、これをのべ給ふに、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫

直入の眞心を決定しまししけり」の文と同一一致するからである。たゞ違つてゐるのは文書には九十五日とあるのが敬重繪詞には九十九日になつてゐる點であるが、これは五と九の間違いか、また夢告は満願の日にあるということが當時の常識であつたのかも知れない。それはともかくとして、私の特に注意したい點は、敬重繪詞の示現文の下に「慥かに示現あり」の一語が附せられてゐることである。敬重繪詞は覺師の上足乗專の著であるから、内容は覺師の物語りと見てよい。その中に「慥かに」と自信を以て語られたということは、おそらく覺師が惠信尼筆寫の示現文を見ておられたか、また父覺惠から慥かに聞いておられた證據ではあるまいか。殊に一部の學者が言はれるように徳治二年に覺師が惠信尼文書とともに示現文を見られたとするならば、敬重繪詞の示現文はいよゝゝ疑い得ない文獻となるであらう。

惟うに夢記の偈には直接宗祖を吉水に導く内容を持つてゐない。あれは宗教生活と性生活との調和を暗示したものである。ところが太子示現の文は、どこまでも出離生死の願いに應えるものでなくてはならぬ。この點をハツキリと區別しておきたい。

輓近社會運動に於ける反宗教的態度

二十二 鐵鎧

序 言

社會に對する宗教の關係は密接なものであつて宗教の持つ役割は非常に重大である。それだけ種々の問題がある。それ等の中注意すべき一つの傾向がある。それは反宗教的態度である。ビボデキ教授はその著に於いて二つの目標を示してゐる。(1) The socialization of the religious life. (2) The spiritualization of the social Question. (F. G. Peabody; The approach to the social Question. 1909. p. 191) これは次の二つの問題になると思う。

- (1) 社會問題の對象として見た教團
- (2) 教團の對象として見た社會問題

第一章 社會問題の對象として見た教團

反宗教的態度について教團として反省又は自己批判をせねばならない種々の場合を考察して見ると、例へば、(一) 神の攝理 (The divine Providence)、(二) キリストの再臨、(三) 禁慾主義、(四) 教團の行過ぎ、(五) 佛教の因縁、等。(一)(二)については正しい教理を誤解して反教團となつたのであるから是正せねばならぬ。(三)(四)については自己批判を要する。

第二章 教團の對象として見た社會問題

第一節 産業革命の影響

産業革命に伴うた經濟の變動の結果、言語・風俗・習慣を異にする人口が都市に集中し之等の人々に宗教的感化が薄弱となり反宗教的無神論的となり教團がブルジョワ階級と結ぶ傾向を生じた。ここに社會問題の「精神化」が要望される可きである。